茜色の歌姫

第二部　大化の改新変

多武峰縁起絵巻

戊是歳、太子、奏請して曰さく、「冀はくば倭の京に遷らむ」とまうす。天皇、許したまはず。皇太子、乃ち皇祖母尊・間人皇后を奉り、併せて皇弟を率いて、往きて倭飛鳥河辺宮に居します。時に、公卿太夫百官の人等、皆随ひて遷る。是に由りて、天皇、恨みて国位を捨りたまはむと欲して、宮を山崎に造らしたまふ。

（『日本書紀』巻第二十五）

額田王、近江天皇を思ひて作る歌

君待つと　我が恋ひ居れば　我が宿の
簾動かし秋の風吹く

（『万葉集』第四巻）

第四章　歌の力

653

その日、飛鳥の河辺宮は、時ならぬ喧騒に包まれた。

突然の宝皇女一行の訪ないに、舎人どもも女嬬どもも慌てふためき、急ぎ広間に宴席を調え、蔵にあるばかりの食を供した。一行が広間で夕餉を食している間、舎人どもは皇女の寝屋を設えねばならなかった。

「今後、宴は無用」

宝皇女が寝屋に入った後、鏡郎女は、大海人皇子に告げた。

「おそらく、あと一年、皇女はこの宮に留まる。費えもあろう、皇子と同じ食を供し奉れ」

その翌日から、河辺宮には、大勢の百済渡りの工人どもが出入りした。彼等は、宝皇女や鏡郎女とともに一室に籠もり、夕暮れ近くなって宮を出た。板蓋宮に代わり新たに造る宮について、談合しているらしいことは察せられたが、大海人皇子も舎人どもも、その場に立ち入ることは禁ぜられた。

難波の邸を引き払い、宝皇女を追って飛鳥へと遷った官どもは列をなして、河辺宮を訪なってきたが、門の裡に入ることすら赦されなかった。

一方、豊日大王は、人々の前に姿を現すこともなく、うち捨てられた長柄宮の内裏に籠もっていると伝わってきた。左右のふぐりを潰され、その傷が癒えても、寝屋を出ることもかなわず、

ただ臥せているばかりという。
葛城皇子もまた、難波に留まった。彼もまた、門を閉じて外に出ることはなかった。中臣鎌子も、同様であるらしい。
難波は未だ、王都でありつづけ、左大臣・巨勢徳陀、右大臣・大伴長徳ら大官は、難波にあって、政事を司ったが、重要な事項はすべて、飛鳥に使者を派して、河辺宮の宝皇女の意を伺った。大海人皇子が取り次ぎ、皇女の詔を使者に持たせ、難波へと帰す。政事は滞りがちになり、豪族どもは、宝皇女が大王の御位に即くよう嘆願した。
まるで、岩屋に籠もった天照の女神のような……。
大海人皇子の脳裡に、かつて、当時は亜那と名乗った額田郎女から聞いた昔語りが蘇った。
日輪の女神が隠れ、世界は闇に閉ざされ、疫病が流行った。同様に、いまの大和は、大王は去勢されて廃れ人となり、新たに大王となるべき皇女は、河辺宮に籠もっている。列をなす豪族どもや難波からの使者の姿は、岩戸の前に集った古の神々のようであった。
これも鏡郎女の策なのだろうか。
そうだとしたら、鏡郎女は、如何にして、岩戸の物語を知ったのか。甘樫丘にあった蘇我の邸の蔵から持ち出した国史に記してあったのを読んだのか。あるいは……額田郎女から聞いたのか。
額田郎女。
その名が浮かぶ度、大海人皇子の胸は苦しく塞がれた。
あの夜、伊勢の稗田阿礼に、七枝の剣について問うてほしいと頼んだ時より、大海人皇子は郎

女には会っていない。難波の長柄宮で、七枝の剣を持した鏡郎女が、宝皇女に随って現れた時、皇子の頼みを、額田郎女が鏡郎女に漏らしたものと、皇子ははじめ思った。
しかし、鏡郎女は、この度の謀には、額田郎女はいっさい、関わっていないと言う。
では、額田郎女は、何をしていたのか。阿礼には会ったのか。
郎女が住まう十市の邑に、舎人を派して、郎女が戻ったか否かを確かめさせるべきではないか。そう思いつつ、大海人皇子は何もしなかった。あるいは、自ら十市に赴き、額田郎女に問うべきではないか。そう思いつつ、大海人皇子は何もしなかった。
……額田郎女を、土蜘蛛に還すな。
鏡郎女は、皇子にそう言った。まさに皇子は、額田郎女に、土蜘蛛の亜那に還れと頼んだ。そして、額田郎女は言った。
……土蜘蛛は、誰にも随わぬ。皇子の意のままに動くかどうかは、分からぬぞ
皇子のふぐりを強く握りしめつつ、額田郎女は悲しげに、しかし、決然とそう言った。
吾はあの折も、亜那が膳臣に采女として随れ去られそうになったときも、何もしなかった。
吾を助けて！
悲痛に叫ぶ亜那を見つめつつ、何もしなかった。
強くありたい……。
いずれ日輪の王国を継ぐ者。
母なる稗田阿礼はそう告げた。このような気弱な性で、あまねく民に幸をもたらす大王になりうるか。

大海人皇子は、左右の手で貌を覆い、うつむいた。

「皇子よ」

背後より声がした。振り向くと、鏡郎女が立っていた。

すでに日は傾いていた。河辺宮の、小さな池のある庭の亭に、大海人皇子は独り、もの思いに耽っていた。

久しぶりに見る鏡郎女は、ひどく窶れていた。後頭部で束ねた髪にはほつれが目立ち、眼の下に黒い皺が出ていた。

「二日の後、宝皇女は、この河辺宮を出でたまう」

鏡郎女は言った。

「新たに造る宮の図面はおおよそできた。二日後より七日、宝皇女は工人どもを随れ、飛鳥の諸処を御幸したまう。その検分をもとに、図面を完成させる」

「飛鳥の諸処を？」

「新たな宮は、ただ、内裏と朝議の場には留まらない」

鏡郎女は、ほつれた髪を手で撫でつけつつ言った。まず、蘇我鞍作の血に穢れた板蓋宮は焼き浄められ、その跡地に、新たな内裏と大極殿を造る。それに留まらず、運河を穿ち、池を掘り、新たに庭や石像物を四囲に配する。

「皇子よ。この河辺宮にも庭があり、池がある」

その意味するところは如何？　鏡郎女の問いに、皇子は応えた。

かつて、隋から伝わった説に曰く。遠く海の彼方に島があり。蓬莱という。その島には不老長寿の神仙が住まう。

池を穿ち、その中央に小さな島を造り、さらに、桃や橘など、仙郷に生えているとされる樹木を植える。庭を神仙の住まう蓬莱と見立てるためである。

「然り」

鏡皇女は頷いた。

「宝皇女は、飛鳥をひとつの庭と見なし、飛鳥をすべて、神仙郷となしたまう御所存。即ち、飛鳥の眺めを一新する興事となる。万の民が使役される」

万の民……。大海人皇子は、呆然と鏡郎女を見つめた。鏡郎女は微笑み、続けた。

「飛鳥は、生まれ変わる。否、大和も……」

しばし、茜色の雲が山の端に浮かぶ空を見つめていた鏡郎女は、つと、背を伸ばした。

「十日の後、焼き浄められた板蓋宮にて、宝皇女は魂鎮の儀を行いたまう。その場にて、額田郎女に、歌をうたわせよ、との詔である」

郎女に？　大海人皇子は思わず唇を震わせた。

「皇子は明日、十市の邑に赴き、額田郎女を、ここへ随れられよ」

すでに郎女は十市に還っている……。そう告げ、鏡郎女は、皇子に背を向けて歩みはじめた。

「待て！」

大海人皇子は叫んだ。

「何故に、額田郎女を、鎮魂の儀にて歌わせる」

「宝皇女が、臣どもの前に姿を現す」
鏡郎女は、振り向きもせずに言った。
「その儀は華やかに飾らねばならぬ。額田郎女の歌の才が、要る」
「何故に飾る」
皇子は重ねて問うた。
鏡郎女は振り向いた。冷たい面持ちに、薄い笑みが浮かんでいた。
「板蓋宮にての鎮魂の儀は、やがて一新される大和の国造りの第一歩となる。故に、額田郎女の歌が要る」
「その国とは、如何なる国ぞ！」
大海人皇子は、拳を握りしめた。
「それを告げねば、亜那は動かぬ！」
亜那……。
その名を耳にし、鏡郎女は俯いた。疲れ切った面差しが、弱々しく歪んだ。
「確かに」
鏡郎女の眼がかすかに潤んでいた。
「ただ、皇女の詔というだけで、あの郎女は動くまい」
「吾は、先にも問うた」
大海人皇子は続けた。
「汝は何故に、応えようとせぬ」

「額田郎女には、かく告げよ」
鏡郎女は、皇子に歩み寄り、押し込むように言った。
「汝の歌の力が、新たな国の行く末を定めてゆくであろうと」

歌には、呪（しゅ）の力が宿ると、当時は信じられていた。七音と五音で構成される歌の一つ一つの文句が、優れていればいるほど、その歌には、天地（あめつち）をも動かす呪の力が籠もると。
国見（くにみ）なる儀式がある。大王が、その国を見渡せるような山や丘に登り、歌をうたう。その歌の力で、国津神（うふすなのかみ）を服属せしめる。
大王のためにかわって歌を作る者を、歌人（うたびと）と呼ぶ。
「では、額田郎女は」
大海人皇子は問うた。
「歌人として宝皇女に仕えよ、との意なりや」
「然り」
鏡郎女は頷いた。
「額田郎女の歌の才、舞の才、語りの才は、皇子もよく知るところであろう」
「それだけか？」
「それだけ、とは？」
「郎女は、多くの古（いにしえ）の物語を知る。その物語と、汝等土蜘蛛の蔵する国史（くにのふみ）とを合わせ、新たな史（ふみ）を編（あ）もうとの意ならんか」

大海人皇子の、常ならぬ鋭い眼差しに、鏡郎女は微笑んだ。
「皇子は慧い」
「その新たな史を、額田郎女の歌舞でもって広め、民を服属せしめる。如何？」
鏡郎女は応えず、ただこう告げた。
「民は、まことの史など求めぬ」
求めるのは、己が服する国、己が服する大王を煌びやかに飾る物語のみ。鏡郎女の言に、大海人皇子は苦々しげに貌を歪めた。
「偽りの史を造らねば民が服せぬ国……そのような国のために使役される万の民は哀れなもの」
大海人皇子は叫んだ。
「宝皇女の詔、吾はとりつがぬ。額田郎女を説くならば、汝等が説け」
鏡郎女は黙したまま、大海人皇子に冷たげな眼差しを注いだ。その瞳がかすかに揺れたのに気づいたとき、郎女は拝礼し、踵を返して去った。
その二日後の朝。
宝皇女の一行は、河辺宮を去った。皇女も、鏡郎女も、大海人皇子には一通りの礼を述べただけであった。
ほどなく、板蓋宮から吹き上げる煙が、河辺宮からも望めた。
そして、十日がすぎた。

重くたれ込めた黒雲の下、板蓋宮の跡地は、一面の焼け野原であった。庭に敷き詰めた玉砂利

は黒く煤け、門塀も、大極殿も、今は炭となって四隅に積み上げられている。
大極殿があったあたりに中央に天蓋がしつえられ、宝皇女が坐していた。その周囲に、白い裳に白い袴をつけ、長剣を提げた女どもが十人ばかり立ち、そのなかに鏡郎女の姿もあった。そして、かつての広庭に、豪族どもが二列になって片膝をついていた。
豪族どもに混じって拝跪しつつ、大海人皇子は、八年前、十四歳の折りに初めて板蓋宮を訪れた時のことを思い出していた。白い壁、朱塗りの柱を横目に眺めつつ階梯を昇れば、太極殿の広間の奥に、当時大王だった宝皇女が坐していた。
あたかも、かつて宝皇女が大王として君臨していた板蓋宮が蘇ったようであった。ただ違うのは、かつて、紫色の裳に、勾玉を吊した冠を戴いていた宝皇女は、髪をおろし、白装束に、手には榊、貌は赤くくまどり、巫女のように身をやつしていることだった。
さらに、巫女装束の大王の御前に列する豪族どもを囲むように、二百を越える女どもが、甲冑をつけ、矛を構えて並んでいた。
彼女らは、鏡郎女が率いる土蜘蛛どもであることは察せられた。この地で斃された蘇我鞍作の鎮魂の儀の警護であるのだろうが、見ようによっては、かつて、宝皇女を裏切り、葛城皇子に随って難波に去った彼らが、土蜘蛛を伴って戻ってきた皇女に捕らわれたかのようにも見えた。
豪族どもに混じって、大海人皇子はそっと眼を四方に向けた。難波から駆けつけたらしい左大臣・巨勢徳太、右大臣・大伴長徳をはじめ、主だった豪族の姿はそこにあったが、葛城皇子や中臣鎌子の姿はない。
否……。

果たして額田郎女は、鎮魂の歌をうたうことを諾したのであろうか。
宝皇女の周囲に随う十人の女どものなかには、額田郎女の姿はない。あるいは、こちらに背を向けて立っている二百の土蜘蛛どものなかに、郎女が混じってはいまいか。
不意に銅鑼(どら)が鳴った。
宝皇女がついと立ち上がった。虚空の一点を見つめ、ゆっくりと、二歩三歩、足を踏み出した。
両手で握りしめた榊を高く掲げ、口に呪(しゅ)の文句を低く唱えつつ、ゆっくりと素足を地に食い込ませるように、円を描いて歩みんだ。
皇女の背後で、鏡郎女をはじめ、白装束の土蜘蛛たちが、同じく呪を唱える。

ひふみよいむなやこと……。
ひふみよいむなやこと……。

一二三四五六七八九十(ひむみよいむなやこと)。「ひ」は霊・日・火を。「ふ」は増えるの意。「み」は身・実。「よ」は世。「い」は息。「む」は産霊(むすび)。「な」は成り、であり、生(な)り。「や」は弥栄(やさか)。「こ」は凝(こ)る。「と」は止まる。
すなわち、霊が、息を吹き返して降臨し、めでたくこの世に留まれ、との意である。

ふるべ　ゆらゆらとふるべ……。
ふるべ　ゆらゆらとふるべ……。

ふるべ、は玉。生命力を宿す宝。ゆらゆら、は、その玉が鳴る音。
すなわち、宝玉を鳴らし、死者の霊を呼び戻そうとの呪である。
誰の霊か。すなわち、八年前、この地で恨みを飲んで死んだ蘇我鞍作の霊。
否……。
その鞍作の精を受け、宝皇女がその腹部に宿していた命。己(おの)が子なる葛城皇子らによって、その父を眼前で切り刻まれ、胎内より夥(おびただ)しい血とともに生まれぬままに流れた赤子の霊か。
大海人の左右で、豪族どもが、息を詰め、かすかに身を強張らせる気配が満ちた。彼らの多くは、八年前、葛城皇子に随いた。なかでも、唇を震わせ、何かにおののく風情(ふぜい)の左大臣、巨勢徳陀は、かつては蘇我の側近でありながら、大軍を率いて甘樫丘の蘇我の邸を囲んだ。

ひふみよいむなやこと……。
ひふみよいむなやこと……。

ふるべ　ゆらゆらとふるべ……。
ふるべ　ゆらゆらとふるべ……。

女どもが唱える呪の声は、次第に高まり、やがて、矛を携えて周囲を囲む二百の土蜘蛛どもの口からも発せられた。重なり合い、響き合い、木霊(こだま)する呪の声に囲まれ、宝皇女は今や、ものに

憑かれ、身を捩らせ、川の流れ舞う落葉のように、烈しく身を回転させていた。長く垂れた白い袖が大きく拡がり、渦となった。

あああああああ！！！！！

皇女は一声、低く唸り、やがて唸りは咆哮と化し、そのまま地に臥せた。
呪の声が、いっせいに止み、禍々しい静寂が立ちこめた。
誰一人、身じろぎもせぬなか、涼やかな声音が、重い気を払うように、遠くより、聞こえてきた。

真蘇我よ……

ひとびとの眼が、一斉に声の方に向けられた。

蘇我の子らは　馬ならば　日向の駒……

この声は……。
額田郎女。
大海人皇子は独り、膝を伸ばして立ち上がった。

宝皇女や土蜘蛛の女どもの白装束を見つめていたひとびとの眼には、いずくともなく不意に現れた額田郎女の衣装は、まばゆいばかりに煌々しく映じた。
萌葱色に縁取られた紅の袍に、桃色の袴。髪を下ろして背に長く垂らし、額には茜色の冠。
美しい孤を描く眉。くっきりとした二重瞼の眼の縁に薄く紅をさし、あかい唇から、艶やかな声音で、再び、歌が流れ出でた。

真蘇我よ
蘇我の子らは
馬ならば　日向の駒
太刀ならば　呉の真刀
諾しかも　蘇我の子らを
大君の　使はすらしき

蘇我の者どもは、馬で言えば、西の日向で育まれた名馬。太刀で言えば、呉の鍛冶が鍛えた名刀。それゆえに、蘇我の者どもを、大王は重用したまう。
飯豊大王以来、常に大王の側近くにあって大和を支えてきた蘇我を讃える歌であった。
口ずさみつつ、額田郎女は地に臥した宝皇女の傍らに立った。皇女は貌を上げ、潤んだ眼差しを郎女に向ける。

郎女は微笑み、手を延ばして皇女の額を撫で、背を伸ばし、両手を拡げ、顎をあげて空を見上げた。

神代より　生れ継ぎ来れば
人さはに　国には満ちて
あぢ群の　通ひは行けど
我が恋ふる　君にしあらねば
昼は　日の暮るるまで
夜は　夜の明くる極み
思ひつつ　寝も寝かてにと
明かしつらくも　長きこの夜を

神代より、人は次々と生まれ、大和に満ち、鴨の群のように隊をなして往来している。しかし、その人の群のなかに、恋しいあの人はいない。

昼は日が落ちるまで、夜は山の端が白むまで、あの人のことを思い、長い夜を眠れぬまま、過ごした……。

郎女の眼差しが、そっと大海人皇子に向けられた。

歌は、寵愛した蘇我鞍作を失った宝皇女の悲しみを現したものでもあり、さらには、十市の邑を長く訪なうことの絶えた大海人皇子にも向けられているように思われた。

つと、郎女は、右手を左の袖に差し入れた。抜かれた右手に、剣が握られていた。

郎女はゆっくりと、剣をかざしつつ、舞い始めた。大きく膝をあげ、焦げた玉砂利を踏みしめ、うつぶせに貌を上げた皇女の周りを歩み始めた。

真蘇我よ
蘇我の子らは
馬ならば　日向の駒
太刀ならば　呉の真刀
諾しかも　蘇我の子らを
大君の　使はすらしき

皇女の傍らに侍っていた鏡郎女たち、焼け跡を囲む二百の土蜘蛛どもが、蘇我を讃える歌を口ずさみ始めた。歌は、次第にその速さをまし、それに合わせて、額田郎女は烈しく動き始めた。

刃をかざし、振り下ろし、薙払い、あたかも、皇女に向かってくる邪な霊を払うかのようであった。

その姿に、豪族どもは古を思い出した。大和が開けてより、常に大王の傍らにあって、大王家の御盾でありつづけた蘇我。

宝皇女を守るように剣を振って舞う額田郎女の姿は、あたかも蘇我の霊が降臨し、彼女のしなやかな四肢に取り憑いたかのように見えた。

不意に、額田郎女は、その動きを止めた。
剣を高く曇天にむけてかざし、貌を強張らせ、膝をやや曲げ、一点を見つめている。

小林に
吾を引き入れて
姦し人の
面も知らず
家も知らずも

土蜘蛛どものうたう歌が変わった。
その瞬間、額田は大きくのけぞった。剣を地に突き立て、狂おしく両腕で己が身を抱き、背をよじらせ、のたうつようによろばい歩いた。
あれは……。
吾を林に引き込んで、姦した男の、貌も知らない、いずくの誰かも知らない……。
蘇我鞍作が、この板蓋宮で死んだ直後に、民の間で流行った歌。それは、王宮の儀式のさなか、不意を打たれ、己を討った者が誰かも分からぬまま、血にまみれた屍となった鞍作の最期の思いを譬えた歌とされた。
大海人皇子は、膝を握りしめた。
あの時、俳優に化け、鞍作のふぐりを握りつぶしたのは亜那……すなわち、額田郎女。

その郎女が、蘇我鞍作となって、刃に刻まれる断末魔を演じている。
宝皇女は、膝を折って地につけたまま、半身を起こし、凝っと荒れ舞う郎女を見つめていた。かつて、目の前で腹に宿した子の父親を討たれる様を、脳裡に呼び覚まされたかのように。
歌が不意にやんだ。額田郎女は、四肢を折り曲げたまま動きを止め、やがて、ゆっくりと地に臥した。うつぶせに倒れ、身じろぎもせず。
重苦しい気を裂くように、雷鳴が轟いた。
いっせいに貌をあげた豪族どもに、雨が降り注いだ。
宝皇女が立ち上がった。切なげだった眼は、冷たい光を湛え、腰を浮かせて狼狽する豪族どもにを見回していた。
「人々よ」
鏡郎女が叫んだ。
「法興寺へ」
鎮魂の儀は終わった。法興寺にて、宴を催す。雨をさけ、響したまえ。
豪族どもは救われたように、立ち上がり、皇女に拝礼し、急ぎ足早に、法興寺の方へ走り始めた。
右往左往する豪族や、駆けつけた伴部どもの合間を縫って、大海人皇子は、額田郎女が倒れたあたりに進み出た。だが、皇子が見たのは、郎女を隠すように、取り囲んで立った鏡郎女らの女どもであった。
「皇子よ」

鏡郎女は、射抜くような眼差しで告げた。
「法興寺へ参られよ」

法興寺は、板蓋宮より北へ一里（約６００メートル）。かつて、蘇我鞍作を討った葛城皇子が、豪族どもとともに、兵士を率いて籠もり、甘樫丘の蘇我の邸を攻める拠点とした地である。
二町（約２００メートル）四方の塀に囲まれ、中央に三重塔が聳え、その周りに、中金堂、東金堂、西金堂が配されている。豪族どもは、東と西の金堂に別れて雨を避けた。
金堂の裡には、酒の壺が並べられ、笥に盛った飯、木の実、山菜が人々に供された。
豪族どもは、早くも赤い貌で、わめき騒いでいた。ことに、左大臣・巨瀬徳陀をはじめ、板蓋宮で鞍作が討たれた時、葛城皇子に与して兵を率いてこの法興寺に集った者どもは、己が心のやましさを払うように、互いのみを叩き、虚ろな哄笑を張り上げている。
喧騒の輪から離れ、ひとり杯を傾けていた大海人皇子の傍らに、僧が膝を突いた。
「皇子よ」

…我が恋ふる　君にしあらねば
　昼は　日の暮るるまで
　夜は　夜の明くる極み
　思ひつつ　寝も寝かてにと
　明かしつらくも　長きこの夜を

額田郎女がうたった歌が、脳裡に焼き付いて離れなかった皇子は、皇子よ、という僧の二度目の呼びかけにやっと貌をあげた。
「中金堂へ参られよ」
僧侶は、耳元で囁いた。
「皇女が、皇子を呼びたもうた」

飛鳥大仏（法興寺）

厨戸皇子が、百済から来た止利なる仏師に鋳造させた、黄金色の大仏を前に、宝皇女が、丸く肉の乗った背を見せ、額（ぬか）づいていた。
片膝をついた大海人皇子に、皇女は身じろぎもせず、傍らに坐した鏡郎女のみが、わずかに眼差しを向けた。
床にうつ臥せる宝皇女は、経文を口ずさんでいた。大海人皇子は、膝をついたまま、皇女の言を待った。
「皇女よ」
経文が途切れたのを見計らい、鏡皇女

が言った。
「皇子が参られた」
宝皇女は、皇子に背を向けたまま起きあがり、乱れた裳を正してこちらを向き、さびた鉄のような声を発した。
「額田郎女は、汝が妃か？」
唐突な問いに応えに詰まった皇子に、重ねて問うた。
「子はなしたか？」
やっと頷いた皇子に、宝皇女は、
「みごとな歌舞であった。側近く、召したい」
と言い、再び背を向け、大仏に向かってひれ伏した。
戸惑う大海人皇子に、鏡郎女は、戸の方に眼をやり、皇女に拝礼して立ち上がった。

「皇女は、やがて新たな宮が成った折りは、額田郎女が内裏に入るよう、希いたもう」
すでに日は沈み、雲間から月影が漏れていた。東と西の金堂の喧騒はいよいよやかましく、けたたましい笑いや楽の音が漏れ伝わってくる。
「内裏へ……」
大海人皇子は、鏡郎女に詰め寄った。内裏に入るとは、采女のごとく、大王の側近く仕えることを意味する。すなわち、内裏に入ってしまえば、滅多に会うこともかなわない。郎女は、冷ややかに眼差しを臥せ、続けた。

「十市皇女もともに、と」
ただ一人の娘をも……。怒りと戸惑いに言葉を選びあぐねる皇子を一瞥し、鏡郎女は、悲しげな眼差しを隠すように皇子に背を向けて言った。
「新たな宮が成るまで、一年はかかる。名残を残さぬよう、慈しめ」
鏡郎女は、宝皇女が祈る中金堂に歩み始めた。
「額田郎女を。そして、汝が娘を」
「いずくに……」
皇子はやっと、声を振り絞った。
「いずくに、額田郎女はいる」
「すでに十市の邑に還った」
鏡郎女は歩みを止めず、言った。
「疾う行け」

馬を駆り、十市の邑に着いたのは、すでに夜更けだった。
驚き出迎えた邑長を、静かに、と制し、大海人皇子は、家の裡に入った。
扉を開けると、額田郎女が坐していた。
髪を結い上げ、薄く化粧し、薄紅色の裳を着け、いたずらを見つけられた童のように微笑み、かつて、睦まじかった折りと同じであった。
額田郎女は、嬉しげに夫なる皇子を出迎えた。

「久しく」
薄く灯火がゆらめく広間に向き合い、額田郎女は、杯に白濁した酒を注いだ。
隣の寝屋では、八歳の讃良と、六歳の十市皇女が、並んで寝入っている。
「皇子が、長く訪なわなかったゆえに」
郎女は、唇は笑みつつ、責めるような眼差しを作って見せた。
「讃良も、十市も、ずっと寂しげであったぞ」
朗らかに笑い、郎女は言を重ねた。
いまだ、讃良と十市は、馴染み遊ぶ折もあれば、互いに争い、互いに泣くまで叩き合う折もある。吾独りにては、なだめることもなかなかなわぬ。そういう折りこそ、皇子の訪ないが待たれることはない。
「風が、この家の簾を動かす度に、皇子のことを思った。しかし、皇子は訪なわぬ。酷い皇子よ」
袖で唇を押さえて笑う郎女に、大海人皇子は、俯いて杯を干した。
口にしたい事どもは、山のようにあった。そのいずれから告げるべきか、定まらぬまま、舌より先に躯が動いた。
膝を寄せ、肩を掻き抱いた皇子を、郎女は柔らかく受け止め、囁いた。
「皇子を、恨んではいない」
郎女の胸元に額を埋めたまま、皇子は身動きを止めた。

「恨んではいた」
貌をあげると、澄み切った瞳が皇子を見つめていた。
「今は、恨んではいない」
「赦せ」
皇子の眼から溢れ出た涙が、郎女の胸元を濡らした。
「吾は……何もできなかった……常に郎女に、無理を強いた」
郎女の手が、童をあやすように、優しげに皇子の髪を撫でた。皇子の声が、震えた。
「鏡郎女に言われるまで、この十市を訪なわなかった」
皇子は、郎女の肩にしがみつき、声を絞り出した。
「気弱な吾を……赦せ」
「吾は」
郎女は、頭頂にそっと顎を乗せ、囁いた。
「そういう皇子が、愛おしい」
眼を閉じ、涙をこぼす皇子を、しばし悲しげな微笑みとともに見つめ、郎女は言った。
「吾は明日、十市皇女を随れて、邑を出る」
貌を上げた皇子に、郎女は眼差しを伏せて続けた。
「宝皇女は越に御幸する」
北の越へ……。皇子は瞬きもせず、郎女を見つめた。
「飛鳥から淡海へ、淡海から吉備へ、吉備から越へ。道々、多くの邑にて国見をされる」

国見とは、大王が王都を離れ、諸処の山や丘に登り、歌を誦することを言う。すなわち、宝皇女が、大王の位には即かずとも、大和を統べることを、隅々の民に知らしめるために他ならないことは、皇子にも察せられた。

「飛鳥に新たな宮が建つまで、伊勢や尾、濃、さらには海を越えて伊予や筑紫にまで御幸されるらしい。吾は、皇女に随伴し、邑々で歌舞をなす」

「それは……」

大海人皇子は、凝っと郎女の眼を見つめた。

「宝皇女の「詔」を承けてのことなるか」

「否」

額田郎女は首を振った。

「吾が意にて」

皇子は眼を伏せた。宮が建つまでの一年のうちは、この十市に通い、郎女に逢えるものと思っていた。しかし、郎女は明日、自らの意思で宝皇女のもとへ行くという。

すなわち、今宵が最後の逢瀬。

「十市皇女も、随れてゆくのか」

やっと、しわがれた声で問う皇子に、郎女はうなずいた。

「十市皇女には、歌舞の才があると、阿礼は言うた」

阿礼……？

十市皇女を伴い、伊勢の阿礼に会ったのか？

眼を見張った皇子から身を離し、額田郎女は居住まいをただして座った。

「あの夜、皇子に呼ばれて河辺宮に忍んだ夜……」

郎女は言った。

「皇子より、阿礼に七枝の剣の在処を問えと言われた後、吾は十市皇女と讃良を随れて、伊勢に行った」

眼をそらし、遠くを見つめるように、郎女は続けた。

「その折りの吾が心を偽りなく言う。皇子は吾に、難波の、大王の御位をめぐる争いのため、吾に土蜘蛛に還れと言った。土蜘蛛は、常に危うい」

郎女の唇から微笑みが消え、硬く動かぬ瞳がまっすぐに皇子に向けられた。

「吾が死ねば、皇子は、十市や讃良を、無事に養うか」

皇子の総身を、冷たいものがかけめぐった。

然り……。

亜那を……額田郎女を守れなかった吾に、危うげに幼い二人の女童を、守り育むことができようか……。

うなだれた皇子に、郎女は声音を和らげた。

「伊勢の、あの洞（ほら）で、阿礼に育まれたあの洞で、懐かしく波の音を聞きつつ、阿礼と、十市と讃良と、三日を過ごした。阿礼はこう言った。十市には、吾と同じく、歌舞の才あり、と。さらに……」

声音は柔らかなまま、威を帯びた。
「これから苦しむ大和の民のために、吾の歌舞の才を使え、と」
再び貌を上げて見つめる皇子に、郎女は言った。
――海の彼方では、大和に組する百済は、唐と新羅の前に窮している。やがて軍が起こり、その余波は、大和にも及ぶ。誰が大和の大王になろうと、万を数える民を兵となし、軍を調える他に術はない。さらに大王は、大和をより強く装うために、宮を華やかに綺羅を飾る。さらに民が徴発される。大和の民は、より、苦しみに喘ぐことになる。
強張った面差しで聞き入る皇子に、郎女は苦しげに唇を噛みしめた。
「それが避け得ぬことであれば、せめて汝が歌舞の才にて、民を慰めよ。阿礼はそう言った」
たとえ苦しみに充ちた日々であろうと、歌舞があれば、一時でも苦しみを忘れられる。それが歌の力であり、舞の力。その力を民に分け与えるのが、汝が役目。
阿礼は、そう語った。
「宝皇女も、鏡郎女も、吾の歌舞の才を求めている。ならば、宝皇女の詔に随えば、吾は、土蜘蛛に還らずにすむ」
郎女の眼から、涙が一筋、ふくよかな頬にそって曲線を描いた。
「皇子と逢えぬは辛い。しかし、同じ辛さなら」
左右の拳を握りしめ、郎女は声を押し殺しつつ、唸るように言った。
「土蜘蛛より、歌人、舞人として、内裏に入りたい」
わずかな灯火に照らされた闇を、薄紅色の裳が舞い、郎女は皇子にしがみついた。

皇子をきつく抱き締めつつ烈しく嗚咽する郎女に、大海人皇子は、凍りついたように黙（もだ）すしかなかった。
「皇子よ」
やがて貌を上げ、間近に潤んだ瞳を近づけ、額田郎女は言った。
「讃良は、皇子に委ねる」
「讃良を……」
「阿礼は言った。讃良は、やがて大和を統べる者になると」
讃良が……？
四歳で、母が剣で己が身を刺し貫いて死ぬのを眼のあたりにし、額田郎女にも十市皇女にもなじめず、ただ皇子を慕い、姿を見せれば裾にしがみつくばかりだった讃良が、いずれ大和を統べる、と？
「讃良を宝皇女の内裏には随れてはゆけぬ」
宝皇女は、己が眼の前で、寵愛した蘇我鞍作を惨殺した葛城皇子の血を引く讃良を、決して側近くには置くまい。
「故に」
額田郎女は懇願するように言った。
「讃良は、皇子の宮にて、あるいは、宮に近くに住む者の家にて、会いたければすぐに皇子に会える所で育みたまえ」

讃良が慕うは、皇子のみ。讃良を慈しみ育むことができるのは、皇子のみ。
「諾」
皇子は強く応えた。
「讃良は、吾が育む」
皇子は、額田郎女の背に、手を置いた。
「汝にばかり、労を負わせてきた」
郎女の貌が、嬉しげに歪んだ。
「皇子」
齢を重ね、二人の女童(めのわらべ)を育むうちに、いつしかふくよかに肉(しし)が柔らかに乗った郎女の躯が、皇子の総身にのしかかった。床に背をつけ、烈しく躯を動かす郎女を優しく受け止めつつ、皇子は、強くあらねば……と心の裡にて呟いた。

額田郎女が河辺宮を去って二日の後。
大海人皇子を、一人の乙女が訪なってきた。
鏡郎女よりの使者、と名乗った乙女を、皇子は広間に呼び、舎人どもを遠ざけて問うた。
「鏡郎女はなんと？」
「今宵」
小柄で手足が細く、幼い貌だちの乙女は、命ぜられたとおりに、硬く抑揚のない声音で言った。
「何が起ころうとも、騒がず、なされるがままに」

それだけか？
そう問う皇子に、
「然り」
と頷き、乙女は拝礼して去った。

その夜……。
河辺宮の門前に、兵士が四人、篝火(かがりび)をたき、矛を構えていた。
「常は二人なるに」
一人の兵士が、寒げに夜空を見上げつつ問うた。
「何故に今宵は四人なのだ？」
「舎人の方より、四人に増やせと言われた」
やや年かさの兵が応えた。
「何が起ころうと、騒がず、静かに皇子に告げよ、とも言われた」
「騒がず静かに、とは？」
先に問うた兵は、首を傾げた。
「わからぬ」
年かさの兵は髭を撫でつつ、言った。
「吾等はただ、命に随うのみ」
ふと、遠くの闇から跫音(あしおと)が近づき、兵たちは矛を地面に水平に構え、腰を落とした。

篝火の明かりのなかに、白い袴を着けた乙女が、姿を現した。
「何者ぞ？」
年かさの兵が問うた。
乙女はにっこりと微笑み、突きつけられた矛に眼もくれず、年かさの兵に、貌が接するばかりに歩み寄った。狼狽える兵に、乙女は囁いた。
「しばし休め」
戸惑う兵に、乙女は続けた。
「との詔である」
言うなり、乙女の膝が、兵の股間に打ち付けられた。呻きをあげて膝を崩した兵の後頭部に、乙女は手刀を振り下ろした。兵は俯せに倒れ、動かなくなった。
すぐさま踵を返し、乙女はもう一人の兵に駆け寄り、爪先で股間を蹴った。兵は両手で痛むふぐりを押さえ、身を折った。
やっと吾に還って矛を構え直した二人の兵は、次々と乙女の餌食となった。一人は拳で股間を打たれ、一人は握りしめられ、地に転がって悶えた。
乙女は満足げに笑みつつ、七転八倒する兵どもの後頭部を次々と蹴った。
四人の兵がことごとく動かなくなったのを確かめ、乙女は闇に向かって手で合図をした。
もう一つの跫音が、闇から篝火に向かって近づいてきた。

眠れぬまま、大海人皇子は、寝屋の灯りをともし、届いたばかりの書を読んでいた。

「老子」と名付けられたその書は、唐の学者の言を記したものだという。
小国寡民、什伯の器有りて用いざらしめ、民をして死を重んじて遠く徙らざらしむ。
舟輿有りと雖も、之に乗る所無く、甲兵有りと雖も、之を陳ぬる所無し。
人をして復た縄を結びて之を用い、其の食を甘しとし、其の服を美とし、其の居に甘んじ、其の俗を楽しましむ。
隣国、相い望み、鶏犬の声、相い聞こえて、民、老死に至るまで、相い往来せず。

国は小さくあるべきだ。生まれた地で生き死に視、遠方に旅することなくせしめれば、船も車もいらず、まして武器や甲冑に身を固めて隣国と争うこともない。古えのごとく、縄を結って文字とし、その地に生ったもののみを食し、家は小さくとも雨露をしのげればよしとし、隣国からはただ鶏や犬の声のみが伝わってくる。
無用の欲を起こすことがなければ、争いもない……。
皇子は、難波の宮を思い出した。百済と新羅の使者が険しい面差しで争っていた。その背後にある強大な唐の軍を恐れ、互いに往来して味方を増やそうとする。いずれ起こる軍に怯え、都の威を飾るため、数多の民を使役し苦しめる……。
もし……。
生まれ育った伊勢の地で、亜那と二人、貧しくとも睦まじく暮らすことができていれば……。
ふと、灯火が揺れた。

風か？
皇子が眼をあげた先に、人影があった。

宝皇女……。
白い衣を身に巻き付け、確かに宝皇女が、冷ややかな眼差しで皇子を見おろしていた。
皇女は、額田郎女を伴い、越に向けて御幸の旅にあるはず。何故に、前触れもなく、河辺宮の吾が寝屋に……？
宝皇女が、己が肩に手をかけ、鋭く降ろした。身にまとった衣がほどけて床に落ち、みごとに輝く素肌が露わになった。
四十半ばになっても、ふくよかに脂の乗った皺一つない四肢。誇らしげに盛り上がった胸乳。
呆然と声もない皇子に、その白い肉が覆い被さった。

いずれ……。
虚ろな眼差しで天井を見つめる皇子に、宝皇女は囁いた。
吾が孕めば、その子に大王の御位を与えよう。
そう言って、宝皇女は静かに寝屋を去った。
皇女は、大海人皇子の腰に跨り、烈しく身をよじり、その快に精が陰に溢れ出た。一度のまぐわいには飽きたらず、宝皇女は皇子の股間に貌をうずめ、陽物を口に含み、やがてそそりたったそれに、己が陰を沈めた。

その快は、額田郎女とのまぐわいでは味わえぬものであった。皇子の脳裡は、ただ白く何の思念も浮かばず、ただ快に総身を委ねた。
宝皇女は、額田郎女を歌人として内裏に召し、十市皇女をも奪い、さらに皇子の胤を吸い尽くした。
今宵、何が起ころうとも、騒がず、なされるがままに……。
使いの乙女の口づてに発せられた、鏡郎女の言が蘇った。
吾は、なされるがまま、皇女に姦された。
姦され、愉しんだ。
皇子は両手で貌を覆い、呻いた。
亜那……。

一月の後。
かつて板蓋宮のあった焼け跡に、数多の民が忙しく、新たな宮の造営にたち働いていた。
重い石を背に乗せ、崩れ落ちそうな膝をこらえて、必死に歩む者。
痩せた腕を動かし、鍬を地に振り下ろす者。
百済から渡ってきた工人が指図するなか、甲冑に身を固めた兵が笞を手に、疲れきった民を怒鳴りつけ、急がせている。
「あれが、伊勢より集められた民」
皇子と並んで興事の様を眺めていた舎人の海部石床が言った。

石床の眼差しの先に、川から穿った渠に流れる水に脚を浸し、その左右の堤を石で固める数百の民があった。

「伊勢にては、稲の刈り入れに男手が足らず、童や翁、媼までが、細い腕で鎌を振るっている」

苦々しげに言う石床に、大海人皇子は、額田から伝え聞いた、母なる阿礼の言を脳裡に浮かべていた。

――大和の民は、より、苦しみに喘ぐことになる。

ふと、彼方より、賑やかな楽の音が響いてきた。

眼をやれば、色とりどりの衣に身を包み、歌い舞う女どもの群が、こちらに向かって進んできた。

この御酒は　我が御酒ならず
酒の司　常世にいます
石立たず　少名御神の
豊寿き　寿き廻し
神寿き　寿き狂おし
献り来し　御酒ぞ
残さず飲せ　ささ

……この酒は、私だけの酒ではない。常世の国で酒造を司っている神が、国の栄えを、民の栄

えを祈念して、歌い舞いつつ醸造し、大王に奉った酒である。残さず飲み干せ、さあ。

板蓋宮の跡に入ってきた女どもの手に、酒の香りを振りまく竹筒が握られていた。彼女らの後から、大きな瓶を抱えた男どもが続く。

いつしか、苦役に従事していた民も、民を使役していた兵も、女どもの舞に眼を奪われていた。

やがて、数多の瓶が据えられ、民も兵も群がって酒を酌み飲み干しつつ、輪になって舞い歌う女どもに和し、賑やかな祭りが始まった。

乙女どもが　醸みし御酒に
我酔いにけり
事無酒　笑酒に
我酔いにけり

……乙女たちが米を噛み、壺に入れて発酵させた酒に酔った。今日もなにごともなく、楽しい酒に、私は酔った。

いつしか数千の民の歌が、飛鳥に響くばかりに木霊していた。

その中心に艶やかな微笑みを浮かべて舞う額田郎女を、額田郎女の舞いに随い、痩せ衰えた四肢に活を漲らせ、一時の慰みに身を委ねる数多の民を、大海人皇子は凝っと見つめていた。